

私たち、子供のための映画教室～平和を考える、は、ウクライナ出身のバレエダンサー、セルゲイ・サボチェンコ氏にウクライナの現状を教えてくださいと取材をしました。

ハリコフという町に住むご友人から送られたという画像を元に、セルゲイ氏は話をしてくださいました。

マンションのような建物の屋根を、ミサイルがこそぎとっていったという画像。ご友人のご自宅が被害に遭われました。出かけていて無事だったというご友人が撮影したその画像は、報道などで見る映像とはまた異なる生々しさのあるものでした。

自分の奥さんや子供をポルトガルに避難させ、自身も近所で避難生活を送っているそのご友人が、合間の時間に撮影できた物を送って頂き、それを見ることが出来ました。ダンススタジオやお店が被害に遭った画像でした。人が亡くなったという現場の画像もありました。

ウクライナの兵士が一時的な基地として利用したり、避難場所として使われたりすることを無効にするためにミサイル攻撃に遭った工場の画像がありました。病院やマンションが攻撃に遭った画像もありました。

セルゲイ氏はそれらの画像を見て「信じがたいことだが」と語りはじめます。「戦争が日常となってしまったハリコフの友人たちは瓦礫を片付けたり、遺体を埋葬したり花を手向けたりすることを当たり前のように行なっている。その変化が痛ましい」

「子供たちも被害に遭っている。いま学校に通うことは出来なくなっている。ロシアの攻撃により学校の建物が破壊されたからだ。復興させたいが材料が乏しくそのままになっている。町の人々は避難生活を強いられ今現在もとてもつらい思いをしている。また復興できたとしても再びロシアから攻撃を受ける可能性もあり足踏みの状況だ」

話を聞いていた子供からこんな言葉が出ました。「ウクライナを元に戻そうとする人たちがいて、その人たちにはウクライナに愛があるのだと感じました」と。

セルゲイ氏は答えて「ウクライナはまだ新しい国。侵攻があって町の人々が団結できた面もある。ウクライナに対する愛が芽生えた人々もいる」と語りました。

子供たちはさらに問いを投げかけます。「奥さんと子供をポルトガルに避難させ自分が残るというのもウクライナへの愛なのかな」と。セルゲイ氏は「男性は戦争中に国外へ逃げる事が出来ない、法律で決まっている」と話します。子供たちは衝撃を受けました。

「ロシアには友人がいる。彼らのことを悪く思うことは出来ない。彼らも口には出せないがロシアに戦争をしてほしくないと思っている。しかし国同士としては戦争をしている。事態はとても複雑だし、今後戦争が終わったとしてもしこりが残ってしまうだろう。国同士の話し合いでは取れにくいそのしこりを、芸術はなくしやすくすることが出来る。人々がお互いを理解するためにこそ芸術は役に立ち、人々を助けることが出来る。戦争が終わり、ロシアとウクライナのバレエダンサーたちが交流する日が来れば、平和をもたらす助けになるだろう。世界をつなげる物が芸術」と、セルゲイ氏は語りました。

取材をして子供たちは、戦争被害の画像について衝撃を受けたこと、自分たちの日常がもし画像のように変化してしまったらどうしよう、と考えたことを話しました。また映画やバレエをはじめとする芸術の持つ役割について学ぶことが出来、大きな気づきを得たようでした。